

## 学位請求論文

### 『古今集時代を中心とした王朝文学の和漢比較的研究』

〔概要要書〕

(渡辺秀夫)

本書は、古今集時代を中心とする平安朝文学における和漢比較的研究をまとめたものである。本書の構成は、第一篇【古今和歌集と漢詩文】・第二篇【漢文日記と日記文学】・第三篇【初期物語と漢詩文】・第四篇【願文の世界】の、四篇二十一章から成る。冒頭（緒言）に△和漢比較的研究▽について述べ本書の態度と方法とを示し、末尾（あとがき）に既発表論文との対照表その他を掲げる。

まず、「緒言」において、本書における稿者の態度と方法とを明示する。ここに言う△和漢比較的研究▽とは、主として国際間の文学の比較対照を行ういわゆる比較文学の一類ではない。△和漢▽の△和▽とは、平安朝の仮名文字による文学作品を指し、△漢▽とは、平安人の受容した漢籍及び、より直接的にはその摂取・受容の日本的展開・プロセスを呈示する平安人の手に成る漢文体の諸作品をいい、そうした広義の日本漢詩文の領域、文華の規範として第一義的に君臨し、優性を誇る△漢▽の世界を、ひとり漢詩文だけのことでなく、和文系作品の表現を支え、その作品創造の媒介項ともなっていた表現の共同の層として捉え、この両者を関連づけ比照することによって、史的存在としての平安朝文学諸作品の価値を正しく見定めようとするのである。△和漢比較的研究▽の意義は、これまで照明のあてられていなかった特殊な分野やマイナーの作品を発掘紹介しようというのではなく、むしろ、和文系列を代表する諸作品を対象として、その新たな解釈と評価を提示しようとするものであり、△和漢比較▽は、そのために選ばれたひとつの有効な手段にすぎない。飽くまでも平安朝文学（国文学）そのものの研究を目指す。△和漢比較▽を称し、「日中比較」とは言わないゆえんである。

本論の、第一篇「古今和歌集と漢詩文」は、古今集歌の表現形成にとって、漢詩文はどのような役割を果たしたかについて論じる。

「第一章 古今集歌の表現形成と漢詩文」は、この問題を総論的・総括的に扱ったもの。

「(一) 古今的表現形成の前提・八詩から歌へ」——『文鏡秘府論』をめぐって——では、平安初頭の漢詩人空海撰述の『文鏡秘府論』を、この期の日本漢詩人たちの最も切実な問題の関心の的であった詩論や文章論の指標（詩や文章に対する考えかたや嗜好の形質・あるいは詩的な言語意識の成熟度の徴表）として捉え、これが、平安前期の歌論——新風の和歌、古今的表現の形成にとってどのように相関するものであるかを述べる。「八意」——詩語と歌語——は、『秘府論』地巻に収める「九意」を取り上げ、これが、空海自身の擬作である可能性を考証したうえで、この時期、既に、ある言葉・題材（文学素材）に対する美的觀念化の意識、詩語觀念の形成というものが成熟してきており、こうした規範的な美的觀念を表象すべきものとしての、日常語とは懸隔した詩語（漢詩における本意・本情論）というもののへの注目と学習が、旧来の伝統と慣用の中で次第に培われてきた日本語による詩のことは、古今的な歌語の形成・整序という言語的成熟に方法的な自覚化を促進せしめた大きな要因となったであろうことを推定する。また、「八対句説」——縁語成立の「基底」は、『秘府論』の随所に力説される対句・対偶法の諸相を具体的に分析し、それは、結局、詩とは、句と句が、あるいは句の内部が、一首の内容（主題）を越えて語（句）として語（句）自体が言語レベルで有機的構造体を実現し秩序化されていなければならないという主張であるとみて、さらにこれを実際の中国詩や日本漢詩の作例に検証したうえで、古今集歌に至って一挙的に顕在化する縁語——それぞれ歌の主題と密接しながらも、言語形式上ことば自身のはたらし（意味的連鎖・イメージの調和的統覚）によって一首に自足的に完結した内在的な構造を実現する——という技法が、詩として自立するための内在律としての構造を持つべく、日本語特有の表現機能を生かしながら開発・形成されてくる経緯を窺おうとするもの。さらに、「八意」と八景——人事と自然——では、『秘府論』地巻収載の「十七勢」を取り上げ、詩論に言う、

題の意（主題・詩人の思想感情）・こころを表現するための景（物色）の役割、即ち詩創作における景と情の兼ね合わせ方のスタイル——言い尽くしがたい心を効果的に表現するための景の敷置案配に関わる殆どあらゆる限りの具体的手法についての高度な分析がなされていることを確認したのち、こうした詩の創作方法における物象叙述の表現機能（景・情に関わる譬喩の問題）への学習・着目というものが、心情を言い表すに際し、それをそのまま表出するのでなく景物に託しこと寄せて表現すべきことを和歌の創作理論として宣言する古今集仮名序の主張の理論的背景となつたであろうことを論じる。

「（Ⅱ）古今集歌の表現と漢詩」では、主に、古今集歌の代表的技法である譬喩と懸詞に焦点をあて、これが漢詩のいかなる摂取・受容過程のなかから生み出されてきたかを考察する。まず、「中国詩の受容と倭詩の好尚——譬喩と見立て」は、漢詩表現を受容した平安人の好尚一般の顕著な傾向のひとつが、言語（文字）によって巧まれた華麗、秀抜な譬喩・見立てにあったことを、『千載佳句』や『和漢朗詠集』などの佳句撰や、島田忠臣・菅原道真等の九世紀後半期の日本漢詩人の作例を分析して確認し、これを古今集歌の表現と対照してその相関を測る。そしてこれを前提として、「古今集歌の表現（一）——譬喩と見立て」で、古今集歌がいかに数多くの漢詩の譬喩・見立て表現を歌のそれとして取用しているかを具体的に指摘し、「古今集歌の表現（二）——譬喩と見立てⅡその古今的展開」では、漢詩に倣った譬喩・見立て表現というのが、単に趣向を借りるというのではなく、和歌独自の表現方法をどのように規定するものになっているか、その和歌的展開の種々相を論じるものである。ここで、譬喩表現を条件として（譬喩乃至譬喩に動員されたことばそれ自身がもつ語の自律的な意味作用を駆使して）想像的な表現領域を仮構・造立するという漢詩に得意な方式に特に着目しこれを倣うことによって、言語的修辞を駆使した新しい意味の発見、ことばの創造作用による虚構的世界の発見的創出という、古今的表現の著しい特質のひとつが生み出されたことを述べる。さらに、「古今集歌の表現（三）——懸詞と物名」は、本来上代和歌の口承歌の特質であった懸詞というのが、記載歌としての古今集歌に至って著しく発達する理由を、同音（音通）を利用する漢詩文の言語遊戯

の事例（史伝・詩論・呉声歌曲における諧音双関語）との対比・対照によって明らかにし、その際、仮名文字の果たした役割の重要性に注意しつつ、物名という技法が、事実と隔絶した言語の記号的な透明性（機能的な表現力）をやまとことば（仮名文字）の特質の中に変換して極限的に伸長したものであったがゆえに、『古今集』中に一卷を占めることの意義をもちえたことを論じる。

「第二章 谷の鶯・歌と詩と——ハ典拠Vをめぐって」は、大江千里歌（古今・春上・一四）を取り上げ、この歌に及ぼした漢詩文の影響関係を論じるもの。従来当歌の典拠として『毛詩』（伐木篇）が指摘されてきたが、これは、本来友人や同胞を大切にすべきことを説諭する詩であって、早春の季を主題としないばかりでなく鶯を詠み込むものでもない。この箇条の解釈に奥深い谷を出て早春の到来を告げる鶯の姿が持ちこまれるようになるのは唐代からであり、唐詩には早春の到来を告げるハ谷の鶯Vという表現が多数見いだされ、これは九世紀の日本漢詩人の詩にも早春詩の題材として広く認められ、「鶯出谷」という詩題は日中両国のそれにも見られる。このようにして、鶯が谷を出ていち早き春の訪れを報らせる早春の鳥（景物）であるということは、『毛詩』本文から直ちに導かれるのではなく、唐詩やそれを承けた倭詩の世界に広く行われたものであるとすることができ。詩人は『毛詩』が原拠であることはよく承知している訳だが、既に変容された伐木篇の意味・表現の根拠は、当句の広範な受容史中に求められなければならないということであり、いわば、点と点を直接結びつけるような「出典論」の在り方が、古今集歌の場合には有効でないことの事例のひとつとして提起するもの。

「第三章 立秋詩歌の周辺」は、『古今集』及び『古今集』成立前夜における四季の歌題（材）的整備情況が一樣ではなく、秋季に関するものが跛行的に充実・先行していたことを『古今集』四季部の内部徴証や、初期の歌合歌の具体例によって窺い、こうした秋季題材への文芸的好尚という我が国側の前提条件のうえに、漢詩文の魅力的な秋季題材が和歌のそれに数多く流入していったことを論証する。それらのうち、特に立秋の歌として著名な『古今集』秋部巻頭の藤原敏行の一首を取り上げ、秋季の到来を「鶯」で捉える発想・表現形式に着目し、これを中国詩・倭詩との関係で考察する。季節のいち早き到来を「鶯」で捉える用例には、秋と並んで春のそれ

がある（「驚春」「驚秋」の詩語あり）ことを、中国詩及びそれらを受容した倭詩の作例から抽出したのち、「驚秋」とは、突然の秋の到来にはっとして全身を緊張させところが動揺する謂であり、これは、秋季を人生的な衰落の相に重ね嗟嘆する中国詩における悲秋の觀念から発想されることによることを確認したうえで、島田忠臣の秋来を主題とする詩のなかには、こうした典型的な驚秋詩の発想形式を踏まえながら、内実は翫賞すべきものとしての秋、このころ造語される和製漢語「惜秋」の心情を内包する、万葉以来の伝統的な秋季への観照の態度を詠む「驚秋」詩が見いだされることを検出・分析し、ここに、『秋来―驚』の悲秋詩の発想形式にのせて、しかも実態的には賞美すべき待望の秋の訪れを詠む『古今集』秋部巻頭の歌が生み出されたとを明らかにする。なおまた、一方の「驚春」の詩語も同じ敏行の『後撰集』春部巻頭歌に見ることができる。これらの例もまた、古今集歌における漢詩文との関係が、単線的・書承的に存在するのではなく、詩文の広い表現史の層のなかからの流入と考えるべきものであることの一例である。

「第四章 紀貫之の和歌と漢詩文」は、古今集撰者を代表する紀貫之の和歌表現について、その漢詩文との関係の深さを考察する。

「（Ⅰ）『貫之集』における屏風絵と屏風歌」は、『貫之集』に収められる膨大な屏風歌の歌詞や詞書の検討を通じ、それらの歌の題材となっている屏風絵の倭絵図様が、唐絵のそれを襲用、脱化したと推定されるものが、この時代の他の歌人の屏風歌に比して極めて顕著に数多く検出され、しかもこれと対応する屏風和歌の表現に着目すると、それらが、単に唐絵図様に規制された受動的、素材的な投影現象という次元のものでなく、唐絵の原画やその原拠となったと考えられる中国の詩文類（本文）の情趣と意味とを生かし、その規範性を尊重しつつ、唐絵様に読み合わせて屏風歌を詠出しているという表現態度を析出することができる。また、「（Ⅱ）紀貫之の和歌と漢詩文」は、同じく屏風歌を対象として、『貫之集』に特異な題材の中に、詩語・詩材が数多く襲用されていることを指摘し、前項の成果と併せて、『貫之集』の屏風歌にみられる歌材の一覧表を作成したうえで、『古今集』との比較対照を行い、その特殊性のひとつに漢詩材を多く含み持

つことになったのは、『ハレー公—漢風』という当代文化のコードに規制されてその表現の場そのものがおのずから漢風を要求乃至許容するものであったことが大きく、反転して、『古今集』が『貫之集』にみえる相当数の漢詩材を取って収めないことの意味は、結局、『古今集』は、一方で漢詩文との深いつながりをみせながらも、それが決して無自覚で、野放図なものでない——『古今集』成立以前に詩材として広く行われながら、いまだ歌材としてはなじまない、より漢風の表現価値に係留されていたものは不採択とする——、即ち『漢風』に対する一定の選別的な態度、見識を保っている一面を物語る証拠として理解すべきことを主張するもの。そして、「(Ⅲ) 紀貫之の和歌表現と漢詩文」では、彼の和歌作品全般を対象として、その和歌表現に漢詩文的趣向の利用が顕著であること、あるいはまた白詩を味読・理解したうえでの詩語・詩想の影響がみられることなどを指摘し、さらに、貫之の和歌表現に顕在的な、旧来の伝統和歌にはみられなかった斬新な詩的表現に着眼しつつ、最も貫之的な歌づくりの手法——甲を乙に見立てるに際し（その見立て・譬喩自体既にその殆どが漢詩のそれを流用する）、乙の語の意味概念の属性を抽出し、これを対立する甲の語の意味概念と調和すべく否定形に変換して、乙に冠することによって、甲は甲でありながら乙でない乙であることを可能にし、ここに、日常的な意味の文脈（事実）からは見いだせない非在のものが、ことばによる虚構的な觀念世界に調和的対立として措定されなおされて、あらたなる意味世界のものとして発見的に提示されるという、貫之（古今的表現）に特徴的な表現方法——そのものが、深く漢詩表現に学ぶことによって可能となつていることを述べる。

「第五章 公宴詩題と和歌——公宴詩題一覽」は、平安初頭以後約百五十年間について、内宴・重陽宴という春秋二季の公宴を中心とした詩題の検索・整備を試み、平安初頭以降、いわゆる『国風暗黒時代』＝漢風賛美期を経過してやがて『古今集』を生み出すに至る時期、漢詩人達の文学活動のうち、とりわけて、文芸的風流行事として行われていた数多くの詩宴・詩会について、その詩題を通覧することを通じて、国風和歌との関係的交渉の有無について検証を加える。各詩題に掲げた出典（参考）の詩句には、白詩や元稹詩からのものが多く、また

そうしたことと連動するように、詩題の季節的題詠としての性格が顕在的になってゆく様子が窺われ、こうした場における集団的な作詩・賦詠というものが、やがて歌における季題（季材）や広く季語觀念を培養する温床の一つとなっていたであろうことなどを推定し、『古今集』四季歌形成の基盤的な様相のひとつを解明しようとするもの。

「第六章 古今集歌にみる漢詩文的表現——対照・一覧稿」は、古今集歌にみえる漢詩文的表現について、現在までに諸家によって指摘されてきたものを基礎として、これに私に取捨、増補を加え、 $\wedge$ 和漢比較的 $\vee$ な対照表にして一覧したもの。若干の例外はあるとしても、古今集歌における漢詩文の影響は、白詩語をも含めて、『中国詩—倭詩』享受・創作の広範な表現の共同の層からの流入とみるべきものと考えるのが、本書の立場であるので、引例された漢詩文は必ずしも各表現の《出典》として掲出された訳ではなく、古今集歌の表現一般が漢詩文的表現に同通、由来することの大きさを確認しようとするのである。

「第七章  $\wedge$ 付説 $\vee$ 『古今集』における「誹諧歌」の意義と本質」は、従来不明確であった『古今集』巻十九雑体部の「誹諧歌」に関する考察。「誹諧」に収められた和歌について、その構造論的、表現論的検討を加えた結果、『古今集』における「誹諧」とは、内容としての滑稽を指すのでなく、『諧調』よく整った表現・正調から外れること $\gg$ を本義とし、古今的表現乃至その具現化された詞歌集としての『古今集』の組織構造の正格・正調から外れた歌体を意味する。編集の過程で撰者達の十二分の討議にさらされて除外されたこれら破格の歌々の集積が五十八首も収容されているのは、これらの歌を巻十九《雑体》の部に「誹諧」として位置づけることによって、逆説的に『古今集』の正調・正格を追認させようとする撰者の意図によるであろうことを論証する。本章は、必ずしも $\wedge$ 和漢比較的 $\vee$ な論考ではないが、漢詩の持っていたことばの表現力をやまとことばに内在するそれとして極限的に伸長してみせた「物名」が『古今集』中にあつて一卷を占めることの理由を明らかにすることは、逆説的ながら「誹諧」の部類が『古今集』に特立される意義を知ることと不可分の関係にあることを主張したいためであり、「第一章（Ⅱ）」の「古今集歌の表現（三）」と関説すべきもの。

【第二篇 漢文日記と日記文学】は、平安朝日記文学の嚆矢、紀貫之の『土左日記』を対象とし、広く日記文学の発生、成立に及ぼした漢文日記の意義や、『土左日記』における漢詩文の影響などについて論じるもの。

「第一章 日記文学の発生——『入唐求法巡礼行記』をめぐる」では、『土左日記』以前を日記文学前史と捉え、当時存在したであろう数多の個人日記・渡唐記録のうちの成書として残る円仁の日記『入唐求法巡礼行記』を取り上げ、日記文学の生成・発生史的観点からその意義についての検討を加える。これまで指摘されてきたような、単なる自然観照や断片的な主観の表白部分の存在は日記文学の本質的評価としてはしばらく措くとして、求法行脚の僧侶としての強烈な自覚を余儀なくされる体験を綴る幾つかの場面には、『行記』が単純な備忘記録であることを脱却して、記者円仁の生々しく昂揚した個的な内界の表出を語って余りある箇条を抽出することができる。その一つは、天台仏教の霊場である五台山における聖体至現を叙す一連の記述であり、さらに注目すべきものに、道教に偏執する武宗皇帝の酷薄苛烈な仏教弾圧の数々を記す条がある。ここで、円仁は、武宗皇帝の主宰する仏教排斥とそれに相對する道教への異常な偏遇・執心、及びそれらに起因する数多の憂うべき事件を、「事実」（既に選択され意味づけられた）として飽くなく詳記することによって、そのような「事実」がいやおうなく確実に表現するものとして、天子の行為に対する求法僧としての強烈な抗議を、この『行記』という記録乃至記録行為のなかに実現しているのであって、ここに、日記（記録）が日記することの中に、日記（事実の記録）を越えて独自の表現の論理をもって自立しうる、日記文学創立の文学的機制を原理的には胚胎しうる事が確認され、この点に、日記文学の発生史的観点から『行記』を評価することができる。

「第二章 漢文日記から日記文学へ」では、平安朝の日記文学の初発『土左日記』は、日記の伝統の中からいかにして一箇の文学作品として特立しえたか、事実を記すという日記の伝統のへ受け継ぎとへ乗り越え、『土左日記』においてどのようなようにして可能となったかを考察する。そのためにまず、『行記』をも含めた当時の記録体の漢文章（広義の日記）における日記文学への胎生の形質の所在を主に国史の文章のなかに探りつつ、十



世紀初頭から新たに登場してくる漢文体の私日記・紀行類にみられる日記概念の変容・拡大化の形勢を検出する。そして、こうした日記概念の変容の趨勢を背景として、しかも、日記・記録の正系とは真っ向から違背しつつ、ほかならぬその漢文日記の公的・正統性を無類のバネとすることによって一挙的にこれと対極的な日記の「私化」を行う、いかにも貫之的な主知的な『土左日記』創立の手法を指摘する。男性の漢文日記のもじりという『土左日記』は、『正格に対する卑俗』というもどき性を必然的に内在する倒語的な作品構造を持たざるをえないものとなったことを、中国正史や本朝史伝類に描かれる儒教的徳知主義に基づく国司の理想像・循吏像に対する逆倒的な引用の在り方や、正格としての古今的表現との落差を指摘することなどによって明らかにする。

「第三章へ付説」『土左日記』における和歌の位相」は、『古今集』中では、和歌を提示する場合には総て「歌を《詠む》」と表記する（「歌を《言ふ》」と表わすのは仮名序の一例のみ）のに対し、『土左日記』では相当数のものが、『言ふ』と表記されることに注目し、『土左日記』が両者を混在させる意味を探る。『詠む』歌は、十分披講するに値するハレの創作歌であり、『言ふ』歌は、日常言語世界の、現実の実生活に密着したケの歌・生活歌であると定義したうえで、これが、『土左日記』中において提示される『詠む』歌と『言ふ』歌両者の和歌表現の位相（古今的表現を実現するハレの創作歌と「ただ言ふ」の日常生活に密着した実情歌）として対応していることを分析する。そして、このことを通じ、この両者の混在乃至、前者に対する後者の優性的なありように、一首としての和歌そのものの自立的な完成度よりも、それを詠作する個々の心情、場、状況を重視し叙述してゆく、和歌外面の事実への注目という、散文による作品を生み出してゆく経緯——歌人としての貫之における日常的身近の世界を日常的口頭語（仮名散文）で記す行為（『土左日記』の創作）を必然化した事由——を、作家論的視野から考察を試み、前章に対する補足とするもの。

【第三篇 初期物語と漢詩文】は、平安前期の物語作品のうち、特に『竹取物語』・『伊勢物語』を対象とし、初期物語文学のジャンルとしての成立や、それぞれの作品の創作方法に及ぼした漢詩文の意義の重要性について

論じるもの。

「第一章 神仙と隠逸——紀長谷雄について」は、初期物語を神仙譚の変形構造として捉える稿者の立場に沿って、特に神仙譚と関わりの強い紀長谷雄について、この期の物語作者の属する階層の代表的な一人として取り上げ、物語と関接・親近しうる文人達の状況を彼の人生史をなぞることによって測ろうとするのである。『白簪翁』は市中に実在した白簪を販ぐ老人の姿の記録という体裁をとっているが、実は中国の神仙譚の知識や表現を駆使した神仙伝の典型を造作したもの（神仙伝的な範型の中での事実・説話の捉え直し）であり、『紀家怪異実録』も、旧師都良香の神仙趣味に影響されながら、長い沈淪の不遇の中に幻怪の世界に踏み入り六朝志怪小説集を倣って収集されたもの。こうした神仙趣味とともに、彼には隠逸的な、現世に対する批判意識が窺われ、それは師道真の薨去後一層深められたと思われる。神仙から隠逸、反俗、超俗への志向をみせる『白石先生伝』はそのような感慨を付托された最晩年の著作であろう。紀長谷雄を直接的に物語作者に擬定しようというのではないが、彼の人生史に色濃く投影する現実世界に対する批評的意識や、それらを寓意化した志怪・神仙譚や詩文諸作品の存在は、初期物語文学の担い手の意識構造を知るための好個の事例である。初期の物語が文人達によって新たに文字の世界に浮上してくるに際して果たした、神仙譚という漢文的鑄型・範型の意義こそがここで強調されねばならない。末尾に「紀長谷雄略年譜」と「紀長谷雄現存作品要覧」とを付す。

「第二章 続浦嶋子伝記の論」は、延喜二十年と承平二年の成立年記をもち、かなり長文の駢儷文で綴られた、いわゆる浦嶋子の伝につづけて、七言三十二韻三百八字の詩一篇と、さらに、浦嶋子・亀媛の詠じる漢詩・和歌群による悲恋的小話を増加させた特異な形態をもつ『続浦嶋子伝記』について、具体的にその漢文出典を指摘し、かつは、この特異な作品構造の分析を通じ、『続伝』の主題や特質を捉え、そこに、延喜期から承平年間における、男子律令文人の文筆活動の産物というべき漢文伝記のある一面を読み取ろうとするものである。『続伝』は、神仙・道教的世界を興味の主体として創出・志向するへ天仙（仙女）と地仙の交流を描く浦嶋子の伝の部分と、『玉台新詠』的な閨怨詩の世界を追補・表現するへ思婦と蕩子Vの怨情を描く長詩、それに、へ悲恋の男女Vの

嘆きを抒情的に敷衍・追加した和歌漢詩連作の部分というような、三部から成っており、おのおの表現形式を四六駢儷の散文―七言―十二韻の長詩―和歌・七絶による連作群と、三様に変えての、三元的な浦嶋子伝の読み替えを共在させる作品であり、この時期、文人の手になる漢文伝が異端的な変容・変質をみせながら、やがて物語文学の周辺的存在になりつつあったことを予測させる点で注目されるのである。

「第三章 初期物語成立史の断章——『続浦嶋子伝記』の意味するもの」は、前章でその特異な作品構造を分析した『続浦嶋子伝記』について、これを、志怪・神仙の漢文体小説（伝記）が伝奇・物語と膚接しうる可能性を、十世紀初頭男子官人・律令文人の具体的な述作行為のうちに呈示する作品として捉え、その初期物語成立史上の意義を追究する。まず、承平の加注・増益というものが浦嶋子伝のいかなる読み直し（享受）であったかを、出典論的に検討し、そこには、これ以上加上しがたいほどの神仙・道教的な文献的粉飾が施されたばかりでなく、空海『三教指帰』の受容をも指摘しうること、また、こうした加注（享受）が行われた場である勘解由の曹局とは、文章生あがりの、机上に文筆の博識を誇る文人達が数多会合し、さまざまな文学的営為が試みられる『文学の工房』とも呼ぶべき特異な空間であったことを述べる。この曹局において、一方に得意とする文才を傾注して神仙趣味の極致を述作する娛しみを味わいつつ、他方、延喜の艶詩（閨怨詩）に触発され、悲恋的テーマを反芻すべく複数の男子官人おのおのが歌詩を競詠する余興を展開したものであろう。こうした文人世界の余技・座興的な述作行為のなかにみられる、神仙と閨怨と悲恋的主题との連結・共存のさまは、初期物語の風貌と重なり合う。その意味で、『続伝』は、漢文体小説（神仙・志怪作品）から△艶▽（閨怨）への志向を媒介として、悲恋的主题・伝奇（物語）へと連接してゆく、文人世界における漢文伝記の変成——初期物語成立史を窺わせる帰趨の一面をたくまずして露呈したものとして注目すべき作品である。ただし、また、駢儷を基本とする漢文体の本書の変容から仮名文字による物語への一步は、近接しながらもなお極めて大きい。この飛躍の一步は、次章において『竹取物語』の成立史の裡に問うこととなる。

「第四章 『竹取物語』と神仙譚——初期物語成立史階梯」は、その表現行為が、漢風の知的範型との緊張関

係になお強く繋留されていた九世紀後半期の男子知識官人の手に委ねられて浮上してくる成立期の物語文学にあって、その作品は、どのようなものとしてありえたか、その担い手である男子知識官人層の側からみた初期物語成立史の一面を『竹取物語』の成立史のなかに検証しようとするもの。この期の官人層の意識には、経学的タテマエの観念論の深層で肥大する不可知世界の幽暗への深い親近と関与がみられ、そこに、神怪異聞の古伝承が文人の手によって採取されるに足る心意の十二分の成熟を推し量ることができる。さらに、紫宸殿の相撲行事のために造作された模型（標）や、大嘗会の折に提出された悠紀・主基両国の模型（標）の造形を分析した結果、我が国の伝統的な宮廷行事の場面が、神仙故事をふんだんに盛る崑崙世界や道家の仰ぐ黄帝や緯書の説話を付帯する西王母像などによって飾られていたことを指摘し、このことは、神仙・道家的世界が広く官人社会一般における集団表象として存在していたことの明徴であり、『富士山記』や『白箸翁』といった著作もこうした観念の範型にすくいとられて成立したものであることを論証する。これらのことを確認したうえで、数次に亙る成立の史を抱え込んでいる現存の『竹取物語』——テキストそれ自身の中にそれぞれの受容の複次的層を内包する——を神仙譚的な読みのレベルに引き据えての解説を試み、神仙譚という範型・類型に依拠しながら成立してくる初期の物語文学の一面を明らかにしようとするのである。ここで、『漢武帝内伝』や各種の女仙伝の話型やモチーフを指標として対照することによって、『竹取物語』本文の従来の解釈にあらたな読みを加えることができる。

「第五章 初期物語と文章」は、男子官人によって述作された初期の物語の文章はどのようなものとしてありえたか、という点についての考察。まず、この期の男子官人の、対句・対偶を基本とする文章観を確認したうえで、『竹取物語』中における対句的文を具体的に指摘し、これが、漢文系の、彫琢潤色を必須とする修辭論的な文章観の規範に引かれてのことであることを示し、一方、散佚物語『はこやのとり』の文章の断片がいずれも和歌的修辭法に色どられたものであることに注目し、初期の物語（平安朝の和語による物語）の始発にあたって、漢文系の文章観がいかに根強く投影していたか、逆にいえば、男子官人の手に成る和語による書くことへの想像にあまるさまざまな模索をこれらの物語の断面が知らしめることの重要性を指摘する。

「第六章 在原業平の卒伝の解釈」は、『三代実録』に載る業平卒伝中の記述「体貌閑麗。放縱不拘。略無才学。善作倭歌」について、国史撰者の記述意識に徹した精確な解説を示し、『三代実録』撰集期における一業平観を改めて措定しようとするもの。「登徒子好色賦」（『文選』）に典故を持つ「体貌閑麗」は平安朝撰述の五国史に一回的に用いられた人物形容の特異な成語であり、好色を含意するものであり、「放縱不拘」は、好色とも関わりながら当局側からみて多分に顰眉すべき行為・行動を非難するもの。また「略無才学」という語句に関しては、まず、「才学」とは経史類の基本図書を中心とする漢籍についての高度で専門的な学問的能力を意味し、漠然とした漢詩文に関する教養的知識一般を指すのでないこと、また、国史が敢えて「無才学」と表記するのは、該官人が律令官僚として官位を得て朝堂にのぼることへの非難、官人性の否定を表明する筆法であることなどを指摘したうえで、結局、この四句十六文字からは、顰眉すべき不羈奔放なもの、官位を得て朝堂に立つことの不当性への非難や資質における官人性の否定、淫楽に類しかねない和歌詠作への尋常でない傾倒、さらに全体に好色を窺わせるものを読み取ることができるのであり、ここに、没後まもなく『伊勢物語』等に顕著に増益されるような業平像や、これに類する説話の温床となった一つの原型（核）を窺うことができる。

「第七章 『伊勢物語』における漢詩文受容」は、『伊勢物語』の初段、第九段における漢詩文受容について考察。第九段の主人公は『楚辞』に描かれた屈原の姿を下敷きにして結構されている。それは、主人公の造形ばかりでなく、より直接的な場面の襲用として「魚父」からの撰取を指摘しうるのである。また、当段を構成する三場面をつなぐ「ゆきゆきて（行行）」の辞句は「古詩十九首」の第一「行行重行行」詩を踏むものであり、この一首が『文選』（李善注・五臣注）では遠く行旅に流浪する夫から故郷の妻を思いやる艶恋の詩に仮托して、佞人の讒言に遇って君主に疎まれ放逐された臣下（忠臣）がかの君主（美人）を思慕する詩として読まれていたゆえに、屈原像を下敷きにする当段に合わせ用いられている理由があり、極めて政治的道義性の強い高潔なる憂国の士屈原を、これとは対照的な卒伝の復元的読解（前章参照）に措定したとき官人性を激しく否定される放恣な業平Ⅱへ昔一男Ⅰの像に取り合わせ重ねたところに、高度な批評性に富む諷諭文学に親炙した漢文学系作者

による遊戯的・パロディ的な表現行為を指摘することができる。また、初段の初恋の相手が性的魅力溢れる二人の美女（なまめいたるをんなはらから）であるのは、『遊仙窟』を踏まえるもので、一代記的構成をとる初冠本の冒頭を飾るハ昔一男の清新であるべき初恋の相手が淫書『遊仙窟』中の五嫂・十娘に重ね合わされるという大胆な取り合わせは、一見、チグハグな文脈上の落差をみせながら、これまた、一方で卒伝に復元した好色な業平像と照応されている訳である。これら両段にみる『伊勢物語』における漢詩文受容は、出典語や詩想などの時代の好みを反映する風俗的な流入というものでなく、先行作品（典拠）の主題的な読みを前提とした引用による重層的な表現世界を創造しえている点で、やがて『源氏物語』に典型化される出典や準拠を多層的に織り成して手法的深化をみせる物語文学におけるハ引用による作品創造の先蹤として殊に意義深いのである。

「第八章 ハ付説▽群書類従本『浦嶋子伝』の検討」は、一部で『続浦嶋子伝記』の成立論と関わりながら、浦嶋伝説の平安期における受容・展開の一樣相について論じる。群書類従本に収められる『浦嶋子伝』は、その成立年代について不明確な部分が多かったが、本書は『続浦嶋子伝記』の省略本をもととして改作されたものであること、改作に当たって引用・利用された語句を検討した結果、その述作の態度は古典籍に直接依拠する出典よりも、漢詩文の世界にひろく行われた趣向や言い回し、乃至慣用の中で一般に熟した辞句を取り上げようとしていることや、我が国の詩人の句をも引用する点において、文章道的正統からみれば極めて通俗的な作品であるが、倭様化された漢文学世界の産物としては、ひとつの特質を表すものとして理解されるべきことを述べ、その成立は平安中後期以後であると推定する。

【第四篇 願文の世界】は、平安朝にあって、第一級の晴れの文学と認められ、膨大な数量の作品を遺す願文について、『本朝文粹』所収作品を対象としてその文学作品としての価値について新たに照明を加え、また、願文文学の展開・変容過程の一つに位置する『玉造小町子壮衰書』を取り上げ、多角的に考察する。

「第一章 願文研究の一視点」は、願文が、仏教法会に付随する集団的なハレの儀礼的文でありながら、また

博士の專業的文として成立しながらも、同時に個の抒情と深く関わる、哀傷様式の文学であつたことを指摘し、特に、追善願文に注目し、願文の様式と構成を整理し、さらにそのうちの女人追善願文及び帝皇（院）追善願文の二種類について、具体的作品の解説を通じて、その特異な作品世界を明らかにする。女人追善願文における哀傷には、死者の人物造形を白詩に描かれた楊貴妃乃至李夫人的な鏤型に比定し形象化しようとする傾向が顕著なこと、帝皇願文には、地上の最高位者の死を悼むための特権的な表現がみられることなどを指摘し、さらに、願文の表現のうち、歌語に出自する語が漢語として流入された事例についての考察を加え、八和漢比較的文観から問題となりうる事例についての覚書を記す。

「第二章『玉造小町子壮衰書』の研究——小野小町異譚」は、『玉造小町子壮衰書』に関する先行の諸説を批判的に踏まえながら、従来注意されることのなかった諸点を指摘し、一箇の漢文伝作品としての読みを提示し、本書がいかなる文学の位相に成るものであるか、殊に、平安中期以降の願文の表現様式の取用という漢文伝としての特異性に照明をあてながら、小野小町の説話的変容に実伝以上に実伝を物語る、その異譚的な作品世界の特質を解明する。本書は長文の序と五言の古調詩とから成るが、序が現世の過去・現在における栄華と衰亡を語っているのに対し、詩は、それを承けて、今生と来世における困苦と喜悅とを対比して構想したもので、両者は緊密な構成をもった不可分の関係にある。『壮衰書』は白氏諷諭詩を正統に受容する紀長谷雄『貧女吟』を話型の手本として依拠し象どる。『壮衰書』が数多くの白氏諷諭詩を引用するのは、その諷諭の詩精神をさらに継承展開させたものだが、これは、諷諭詩を重視する院政期乃至鎌倉以後の『白氏文集』享受の動向と連動するものと思われる、他方、本書の序にふんだんに引用される『遊仙窟』の物尽くし部分への強い興味や、『往生要集』の利用などとともに、『壮衰書』の成立年代（平安中後期以後）を推定させる。『壮衰書』は壮麗な駢文調にのせて仏教的観点から人の世の壮衰榮枯を詠嘆し、浄土への救済を主題とするが、このような文学形式をとるものは願文であり、本書は願文の形式・表現を模して製作されたと考えられ、この様式に比定することによって初めてその文学質がよく理解されるのである。『壮衰書』は通行既製の小町説話と密接に関わりながら、しかもその老殘落

魄の流浪的側面において異譚的に膨らんだ像を特徴的に分担して描いたものであつて、仏教的な因果応報観に基づいて、好色・驕慢、さらには奢侈の限りを蕩尽した罪深き希代の美女の現世における報い（現報）として餓鬼道に墮とされたごとくに描かれたのが、この老婆Ⅱ玉造小町なのであつた。このような、人世の地獄に苦悶する小町を救済するために選び取られた文学的様式こそが、女人の出家・追善・供養のための法会の折に朗誦される願文なのであり、《小町供養》の一類としての『壮衰書』が願文の様式を必然とする事由はここにある。

「第三章 願文用語略稿」は、新訂増補国史大系本を底本として、『本朝文粹』（卷十三・十四）所収の願文作品を対象に、その語彙を集成したもの。索引というよりも、願文の用語・語彙を一覧することで、その文章上の特質を俯瞰しようとするもので、前々章の資料的な補足。

（以上）